

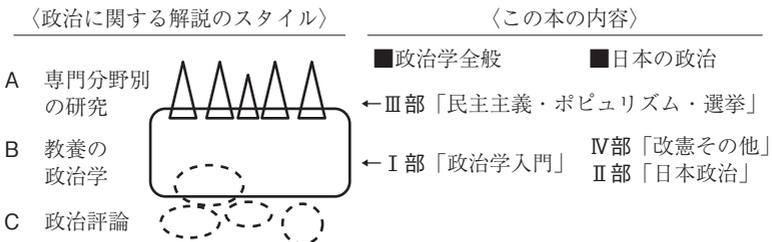
はじめに

政治は、人々を助ける公共政策、市民が享受する自由と民主主義から、デマ、独裁や戦争、戦争の防止までを含む世界です。政治学は、そうした現実を知り、歴史、(中範囲の)理論、複数の価値観を学び、解説策を検討する学問です。そうした視野の広さ、現実感覚、評価・提案・議論の技術や習慣は、マスコミ、政治家、公務員の志望者はもちろん、社会のさまざまな仕事・活動で役立ちます。

この本は、大学の教養科目(政治学・日本政治論)のテキスト、および専門科目の参考書として書きましたが、一般の市民、マスコミ関係者、さらに政治家の(を目指す)方々にも、「教養」としてご高覧いただければと存じます。

下の図のように、「日本の政治」の各種情報や選挙分析、憲法論争だけでなく、コンパクトだが学術的な「政治学入門」や民主主義・ポピュリズム論を併せて読み、理解し、考えられるのが、この本の特徴です。身近な現実政治の知識と、政治学の理論(海外の情報を含む)を結びつけることには、たぶん大きなメリットがあります。

この本の内容と、解説のスタイルについて



さらに、読者の方々がリサーチするための参考文献、ウェブサイト(や映画)へのガイドブックとしても、活用できるように工夫しました。

ここで、政治と政治学の「魅力・効用」について、授業と研究の経験から述べます。

政治（学）が好きな人の意見は、①「政治や民主主義は重要なので、勉強して政治参加したい」、②「政治家やマスコミを志望する」、③「政治はダイナミックで、歴史も、正義も悪も登場しておもしろい」、④「政治学は理解しやすく研究してみたい」といったものでしょう。どれもその通りで、①は政治学教育の公式目的であり、③は、現実的でしかも少しは希望を持てる学問だということです（すぐれた映画のように）。④は微妙ですが、社会学・社会思想はマクロ、法律学はミクロの学問である（どちらも重要ですが）のに対して、政治学は「中範囲」の理論・調査なので取り組みやすい印象が筆者にはあります。

政治（学）に無関心な人の意見は、⑤「政治は自分の生活に関係がない」、⑥「政治は変えられない」、⑦「政治・政治学は難解だ」、⑧「自分は民間企業に就職するので」などです。⑤と⑦は、少し学べば誤りだと分かるでしょう。⑥と⑧は半分正しいですが、政治は多くの人の意思と行動が集まった場合には変わってきた、民間企業で役立つ政策研究、社会調査、議論などのスキルは政治学でも学べる、と修正できるでしょう。

❖この本の内容とレベル

日本政治、政治学入門、民主主義などについての教科書を、僭越ながら「ガイドブック」と名づけたのは、基礎知識の解説から、政治学研究へと案内し、また政治的争点への賛否両論を知って、あれこれ考えていただく趣旨です。

前のページの図では、タテ軸で政治についての解説・情報を、3つのスタイル（レベル）に区別しています。政治家や評論家の解説（C）は、経験にもとづき重要ではあっても、ときに根拠のない独断を伴います。学問的な専門研究（A）は、テーマごとに詳細に分析しますが、細分化され難解なものもある。その中間に位置する「教養（の教育）」（B）は、誰でも知っておきたい基本・常識を、学術的研究にもとづき、かつ分かりやすく全体像を把握できるように伝えるものです。

同じ図の右側に示すように、この本は、政治学の基礎と現代の日本政治を併

せて取り上げ、両者を関連させて学べるように、デザインしました。「教養」レベルでは、I部「政治学入門」が、広い政治学の全体を11のテーマに整理し、キーワードを理解しながら学びます。第II部「日本政治の基礎知識」と第IV部「憲法と統治機構をめぐる議論」は、憲法、国会、政党、選挙、内閣・行政、地方自治、さらに政治的な対抗軸や理念を説明します。日本で極端化し、ゆえに政治問題化しやすい憲法・改憲問題にも、独立した章を設けました。また、教養から専門のレベルに相当するでしょうが、III部「民主主義とポピュリズム」は、近現代政治史から始めて、国際標準的な理論をそれぞれ解説し、両方の視点を用いた日本の選挙・政党の研究（8章）に至るまで、具体的に分かりやすく書きました。

なお、政治学研究としては、本書は、民主主義の4要素による定義、自民党優位の説明、日本のリベラル勢力の役割と弱点、ポピュリズム（扇動政治）の2種類の定義と「強さ」の説明、日本の改憲論と「合意型改憲」などについて、比較的知られざる情報や新たな仮説を提示しました。こうした「実証研究しにくい重要なテーマ」が、より研究されるきっかけになればと願います。

❖ アクティブ・ラーニング（能動的な学び）のための工夫

日本でも、アクティブ・ラーニングが重視されるようになりました。勉強は、知識を暗記し、裏話やトリビアを楽しむだけでは足りません。とくに政治は、意見や利害が分かれ対立する（それが意味のある）世界ですから、複数の立場や主張を知り、ときどき疑い、妥当性や解決策を考え、意見を述べ議論する力が身に付けられます。また現実社会にアクセスするため、データ分析や、社会の状況や現場の（少なくとも新聞や映像による）観察・認識が、求められます。

本書は、そうした自主的で能動的な勉強、さらにディベートを進めやすいように、いくつかの工夫を設けました。

◎各章末で、そのテーマに関連する教科書とともに、本文で用いた参考文献やウェブサイトを紹介した。巻末の長大なリストではなく、各章ごとの文献リストなので、研究入門にも利用できるかもしれない。

（なお、紹介した新聞記事・論文の大部分は、インターネットで読める。）

- ◎本文中のカッコ内に、できるだけ、参考文献をページ数または章まで案内した。読者は効率的に、情報源にアクセスできる。
(今日の政治学では、法律学や以前の政治学と違い、書名・論文名の情報だけで該当ページ数を書かない場合があるが、読者——そして著者自ら——が情報源を確認するにはとても不便で、参考文献表示の本来の目的を考えていただきたいと思う。)
- ◎問題を多角的に考え、ディベートにも活用できるように、制度や争点について、賛否両論など複数の主張を紹介し【議論の整理】の表も設けた。
- ◎図表6-1の年表で、近現代の政治や社会の有名な場面・事件をリアルに「体験」できる映画を紹介するので、関心に応じて見ていただきたい。

なお、今回の全訂第3版発行に当たっては、「教養の政治学」という新たな副題にもふさわしいよう、つぎの改訂・追加を行いました。

- ◎I部「政治学入門」でページ数を増やし、説明をさらに分かりやすく工夫するとともに、
- ◎授業などでの「アクティブ・ラーニング」に使えるよう、読者が自分（たち）で政治現象の簡単な調査・分析を試みる「練習問題」や、少しだが映画・国歌の「映像鑑賞」を、盛り込んだ。(練習問題は、正解の例を第I部末に掲載し、あるいは本書II部以下での解説につないでいる。)
- ◎II部、III部、IV部でも、データや記述を更新した。とくに、III部の6章（民主主義）、7章（ポピュリズム）、8章（選挙と政党）については、現実政治の動向と、筆者の研究の進展(?)に沿って、大幅に加筆修正した。

2024年春

村上 弘